不定期刊行　　第652号　2018.08.15

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩

三重インターハイ雑感

例年にない暑さ。災害級の暑さという警戒情報が出されている中、三重県で行われたＩＨは暑さを回避するために、大幅な日程及びコース変更を余儀なくされた。もともと標高が低く、リスクは指摘されていたのだが、それがその予測通りの結果をひきおこしそうな状況となる中で、当初の計画を大幅に変更して大会は行われた。しかし、結果的にはその判断は正しかったのだろうと思う。予定通り行っていたならば、おそらく熱中症、大会リタイアが続出しただろうと思う。2年前の岡山大会の反省を生かし、アドバイザー的な役割の大会随行医師の意見を参考にしながら、大会本部の下した判断は称賛されていい。

昨年の春の栃木の雪崩事故に続き、ここで万が一の事態が生じたとしたら、世間の登山界に対する風当たりはどうなるだろうか？考えただけでも恐ろしい。僕は、自分の学校が参加した関係者として、同時に大会運営サイドの中央総務委員の一人として、大会直前（7月29，30，31日）の下見でフルコースを歩き、開会式の日（8月3日）には大会中に視察に訪れた大城和恵ドクターと初日のコースをフルに歩き、行動初日（4日）と3日目（6日）には専門委員長隊と同行する中で、山にはいった。実際歩いてみると、歩けないことはないし、稜線を爽やかな風が吹く日もあった。その意味で下見も万全、体力も気力も十分なチームにとってはやや消化不良の大会だったかもしれないが、1日目の行動離脱が2チーム、2日目の行動離脱が3チーム、最終日は全チームが御在所岳に登ることができたということを考えれば、大会としては大成功だったと思う。

2年ぶりに出場した本校の生徒たちも頑張った。結果は98.2点、入賞まであと0.6点という高得点で10位だった。コース縮小で差がつきづらかったのだろう、上位は僅差。優勝した修道高校はなんと100点満点であった。ともあれ、多くの教訓を残して三重大会は終わった。

準備から大会終了まで、そして今まだ後処理をされている登山隊長の葛原先生、総務委員長の松尾先生には心からお疲れ様の言葉でねぎらいたい。これだけの大きな大会で、予定されていた内容を全く組み替えるということは容易なことではない。わずかな時間の中で、それぞれの役員のポジションや動きをもう一度ゼロから組みなおし、シミュレーションして、翌日の行動に備える。そんな中で突発的な事項が次から次へと起こってくる。トップに立つお二人はほとんど寝る間もない1週間だったと思う。本当にご苦労様でした。僕も28日から6日までの間に、6日間入山したが本当に消耗した。（写真は大会2日目、八風峠で休憩中のＡ隊生徒たち）

夏合宿　裏銀座・雲の平

三重から帰った翌８日、学校へ行き、１、２年生と夏合宿の準備。台風の動向が気になったが、予想以上に東にそれていってくれたので、朝から天気はいい。ゴーサインだ。9 日、朝５時に学校に集合し、七倉に向かった。合宿参加者は今年は男子ばかりとなり、2 年生が４名、1 年生が６名の計 10 名。顧問は私と河竹先生、それに外部コーチの松田さん、河竹先生の奥さんが同行した。七倉から頼んであったタクシーに乗り込んで高瀬ダムへ。6 時チョイすぎに出発。先日の三重の最高点が登山口の高さ。さすがに肌寒いくらいの陽気である。初日はブナ立て尾根を登る。準備合宿が功を奏したのか、途中１年生の１名の生徒が足を攣るということがあったが、それ以外は大きなトラブルもなく、5 時間半ほどで烏帽子小屋に到着。水代をサービスしていただく。最もありがたい心遣いだ。台風の影響か、テン場は比較的すいている。天気もいいので、烏帽子、四十八池方面でゆったりとした時間を過ごした。

２日目は三俣蓮華までの長丁場。早朝４時に出発、6 時半に野口五郎小屋。お茶をご馳走になり、元気が出る。雪渓が早く消えたことと、このところの雨が降らない影響だろう。五郎の池は涸れていた。このさき、どの池も渇水しており、今年の夏山の状況を象徴しているかのようだった。竹村新道を分け、東沢乗越を越え、水晶小屋までの道をじりじりと登っていく。裏銀へ足を踏み入れるのは、本校へ来た５年前以来のこと。そのときは、天候が悪化し、急速に気圧が低下したことも相俟って、2 名の生徒が高山病の症状を呈し、三俣蓮華の診療所にお世話になったが、今日はそのようなこともない。体力的に自信がないという一人以外、全員が水晶の頂上で山岳部歌を歌った。ワリモを越え、鷲羽の長い下りを無事下って三俣蓮華のテン場に到着したのは、2 時だった。藤枝東の 32 名の大パーティも同宿だった。夕刻からは雨となり、朝方まで降っていた。

３日目はサブ行動で、雲の平をピストン。雨はあがったが、すっきりしない。今回の合宿を決めるにあたって、生徒たちの希望が一番多かったのが、「雲の平に行きたい」ということだった。というわけでせっかくの雲の平であったが、残念ながら天気には恵まれなかった。しかし、サブ行動と言うこともあり生徒たちの足取りは軽い。4 時出発、雲の平の魅力をゆっくり楽しみながら、雲の平山荘までピストンして 9 時 15 分テン場に帰着。天気が幸いしたのか、スイス庭園ではライチョウの親子も顔を出迎えてくれた。10 時半、テントを撤収し、本日のテン場双六小屋を目指す。三俣蓮華岳、双六岳を越える。生徒の疲労もピークに達しているが、3 日目になれば体は山に馴れてくる。縦走の醍醐味を十分に満喫。日曜日とあって、続々と登山者が登ってくる。双六のテン場が心配だったので、実は一計を案じてあった。同行の松田さんと河竹さんの奥さんには雲の平をカットして先行してもらい、テントを二張り持って行ってもらって場所取りをしてもらってあったのだ。作戦は大成功。僕らが着いたときはテン場は色とりどりのテントで埋まっていたが、一番の特等席にテントを設営することができた。チームプレイ成功。この日は、静岡の富士東と大阪の高津高校が同宿だった。最終日は、5 時に出発、小池新道を下り、10 時に新穂高温泉に下山。3 泊 4 日生徒たちは支え合い、励まし合いながら、ほぼノートラブルでの合宿だった。

野口五郎岳山頂